

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。  
Copyrighted materials of the authors.

-----  
タイトル：「朝鮮語歴史言語学のための共有研究資源構築」共同研究プロジェクト研究会（平成22年度第1回研究会）

日時：平成22年9月18日（土曜日）午後2時より午後4時

場所：AA 研306マルチメディアセミナー室

報告者名（所属）：陳南澤（AA 研共同研究員、岡山大学）

報告タイトル：「『日韓英三國對話』と開化期の韓国語について」

-----  
要旨

『日韓英三國對話』（1892）は、明治25年に赤峯瀨一郎によって作成された開化期の朝鮮語（韓国語）学習書である。本書は第1部「對話」が第1章~第24章、第2部「雜項・單語・對話」が第1章~第26章で構成され、自序と第1部の間に、「日韓言語之關係」「일본언문이로하」「濁音 對清音」「日本イロハ歌」「英語竝ニ韓語發音考」の項目に関する記述がある。本文の基本構成は、韓国語の文をハングルで書き、その発音を片仮名で併記し、韓国語の文に対応する英語と日本語の文を下の欄に書いたものである。また上の欄には、注釈のようにして、補充説明や関連する韓国語の文が入れている。

本書は会話書であり、ソウル方言を収録することを原則としており、李重元と玄采という人物もこの本の成立に関わっている。このような理由で、開化期の韓国の教科書や新聞などの文献にはあまり現われない、当時のソウル方言の語彙や会話体の特徴が、次のようによく現れている。

- 1) 現代韓国語のように助詞「은/는 을/를」が使われている。当時の他の韓国の文献では「은/는 을/을」が使われるのが一般的である。
- 2) 現代韓国語のように叙述終結語尾「ㅂ니다/습니다」が使われている。当時の他の韓国の文献では「ㄴ니다/네다/ㄴ다」を使うのが一般的である。
- 3) 母音「ㅑ/ㅓ」が片仮名のエ段で記されており、単母音化が既に終わっていることを示している。
- 4) 母音「・」についても、ハングル表記と片仮名表記から、既に音変化が終わっているものと解される。

以上のように、本書は当時韓国で刊行された文献と比べ、現代韓国語の特徴を表しているところが多いが、本書は現代韓国語の形成過程を明らかにするのに重要な価値を持つと思われる。これから『交隣須知』と『韓語入門』（1880）、『日韓通話』（1893）など、明治期に発行された韓国語学習書の韓国語史における価値を総合的に分析する必要があり、このような研究は、現代韓国語の形成過程を明らかにする上で役に立つと考えられる。